

はり みず う たき いし がき
漲水御嶽と石垣



はり みず う たき よ そう せい しん わ じん だ こん
漲水御嶽は「ツカサヤー」とも呼ばれ、宮古創世神話や人蛇婚
 説話などにいじられており、古代の宮古の人々の源流をさぐ
 うえ き ちょう こ だい ひと びと げんりゅう
 上からも貴重な御嶽です。南側の石垣は、1500(弘治13)年
 なか そ ね とう ゆみや ちゅうざん おう ふ せん どう や え やま あか は ち せい とう
 に、仲宗根豊見親が中山王府の先導で八重山のオヤケ赤蜂征討
 む さい しょう り しん
 に向かう際、勝利することができたら神
 いき せい び ほう のう やく そく み ごと
 域を整備、奉納すると約束し、見事勝利
 したために築かれました。当時の石造技
 術を知る上でも貴重な石垣です。



そう せい しん わ
宮古創世神話

しま かたち たい こ むかし や
 まだ島の形がなかった太古の昔、弥
 くみの かみ あまてだ さす あまのいわど はしら
 久美神が天帝から授かった天岩戸の柱
 はし おおうなばら な い
 の端を大海原に投げ入れてできたのが
 宮古でした。天帝は次に赤土を下ろ
 こ いつのかみ げ かい お ひと よ
 し、古意角神に「下界に降りて人の世
 づく し こ しん めい たま
 を創り、守護神となれ」と命じ、玉の
 かがや め がみ こ い たま と も い
 ように輝く女神の姑依玉と共に行くこ
 みと りょう
 とを認めました。古意角・姑依玉の両
 おお かみがみ つ ち じょう
 神は、多くの神々を連れて地上に降
 はり みず う たき ひがしがわ ひやるみすあめ
 り、漲水御嶽の東側にあった漲水天久
 ざき みさき きよ かま さま ざま
 崎という岬に居を構え、様々なものを
 う だ こころ うつ たの
 生み出し、神の心を映し出した楽しい
 ころ
 人の世を創りました。その頃、島は赤
 土ばかりだったため、天帝は次に黒土
 くろ つち
 を下ろし、こうして作物がよく実るよ
 うになりました。そしてふたりの間に
 さく もつ みの
 宗達・嘉玉の男児と女児が生まれ、ふ
 たりが大きくなった頃、天帝は紅葉を
 み き そ う の かみ あお くさ
 身にまとった木装神という男神、青草
 ふさ そ う の かみ を身にまとった草装神という女神を下
 ろしました。そしてそれぞれ宗達・嘉
 ふう ふ にし す
 玉と夫婦となり、東・西に住み、これ
 が現在の東仲宗根・西仲宗根だといわ
 れています。宗達夫婦は世直真主とい
 う男児を、嘉玉夫婦は素意麻娘司とい
 う女児を産み、後にこの二神が夫婦と
 なり、子孫繁榮し、宮古島民の祖とな
 ったといわれています。

じん だ こん せつ わ
人蛇婚説話

ひら ら すみ や さと み ぶん たか とみ
 昔、平良の住屋の里に、身分も高く富
 さか
 に栄えた夫婦がいました。子がいな
 かみ いの むすめ
 かったので神に祈ったところ、娘を授
 さい
 かりました。その娘が14、5才の頃に
 にん しん おど りょうしん たず
 妊娠したので、驚いた両親が尋ねると、
 だれ わ しろ きよ わか もの
 「誰か分からない白く清らかな若者が
 まい ばんしの い ゆめご ち ゆる かさ
 每晩忍び入ってきて、夢心地で夜を重
 からだ
 ねるうちにこの体になった」と言うの
 ふ しん おも いと さき はり
 で、両親は不審に思い、糸の先に針をつ
 かみ さ
 けて男の髪に刺すように言い、娘はそ
 よ あ た
 のとおりにしました。夜が明け、糸を手
 ぐ
 繰って行くと、漲水御嶽の洞の中に首
 だい じや
 に針を刺された大蛇がいました。両親
 かな
 は驚き悲しましたが、その夜、娘の夢
 あらわ わたし
 にその若者が現れ、「私はこの島を創っ
 こいつの け しん まも
 たたか
 た神、恋角の化身である。島を守る神を
 創ろうと、あなたに思いを寄せた。必ず
 にん
 3人の子を生む。3才になったら漲水
 かた
 へ連れてくるように」と語りました。そ
 の夢の通り、3人の娘が生まれ、3才の
 ときには言われた通り連れて行くと、御
 嶽の中から恐ろしい形相の大蛇が出て
 に
 きました。母は驚き逃げようとしたが、娘たちは大蛇に飛びつき、ひとりは首に、ひとりは腰に、ひとりは尾に抱きつき、御嶽の中へ消えていきました。その夜、大蛇は光を放って天に昇り、娘たちは島の守護神になりました。

くら もとあと 藏元跡



蔵元は消失し、民家に標柱が立つのみ

- さいばんにしかいやあと
①在番西仮屋跡 ④学校所跡
②在番仮屋跡 ⑤詰医者仮屋跡
③在番東仮屋跡 ※仮屋：在番の宿舎



『みやこの歴史』宮古島市史第一巻通史編(2012)より

16世紀初期に仲宗根豊見親が開設した蔵元は、当時の行政庁にあたります。主に首里王府に納める年貢を取り扱っていました。当初は茅葺きでしたが、1682(康熙21)年に火事で焼失しました。1685年に瓦葺きに建て替えられ、行政機能も拡充整備されていきました。1868(同治6)年に改築され、堅牢な石垣廊と楼門に囲われた広壮な庁舎となりました。1902(明治35年)に宮古島府と改称され、元在番東仮屋を改築し、移転しました。その後、建物は1921(大正10)年に火事で焼失し、石垣なども漲水港の埋め立て工事に使われ、蔵元の痕跡は完全に消失しました。



くら もと むら ばん しょ こう ず 蔵元・村番所の構図

くら もと 蔵元

くら もと 蔵元

くら もと 蔵元

村番所 (地方役所)

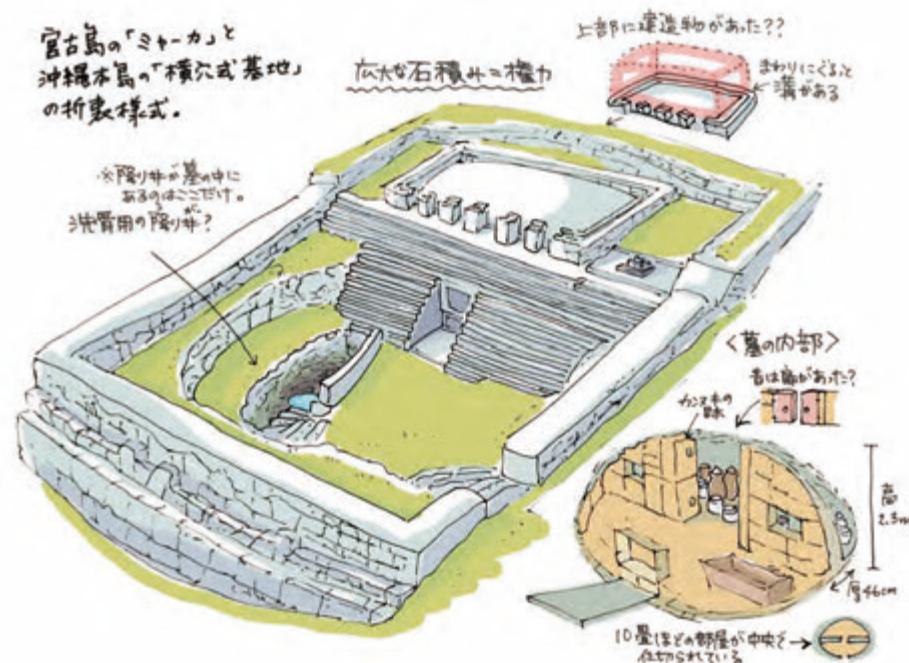
村番所 (地方

とう ゆみ や ばか なか そ ね とう ゆみ ゃ はか
豊見親墓 (仲宗根豊見親の墓)



せい き まつ しょ とう し はい しゃ く み り ん
15世紀末から16世紀初頭にかけて宮古の支配者として君臨
なか そ ね とう ゆみ ゃ ち ち ま ゆ ぬ ふ ふ あ とう ゆみ ゃ れ い と むら ち
した仲宗根豊見親が、父、真誉の子豊見親の靈を弔うために築
ぞう つた さ い ら い お ぎ な わ じ ま
造したと伝えられています。宮古在来の“ミヤーカ”と、沖縄島
よこ あ な しき ぼ ち せ っ ち ゅう よう し き ぶ ン か こ う り ゅう う ら
の横穴式墓地の折衷様式で、沖縄島と宮古の文化の交流を裏づ
だい ひ う て き ふ ン ぼ ほ し つ し ほ う い し が き か こ に し が わ
ける代表的な墳墓です。墓は墓室の四方を石垣で囲って西側に
で い ぐ ち も う に わ き た す み ち い う が 一 も う
出入り口を設け、庭の北隅には小さな降り井を設けてあります。
ぜ ん み ん だ い か い だ い ほ ど こ じ ょ う ぶ
また、墓室の前面には13段の階段が施され、墓室の上部
お お せ き ち ゅ う た
四方には大きな石柱が立てられています。

宮古島の「ミヤーカ」と
沖縄本島の「横穴式墓地」
の折衷様式。



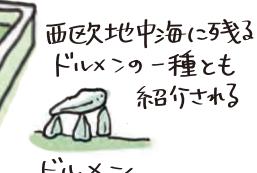
よこ あ な しき ぼ ち
ミヤーカと横穴式墓地

ミヤーカ(平地式)



石棺を囲うのは
宮古独特

宮古に古くからある
風葬墓。



自然の洞窟や岸壁
などを掘り込んだ墓

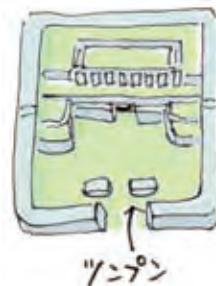
横穴式墓地



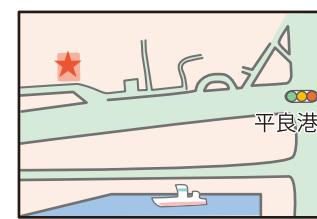
ミヤーカは宮古に古くからある
風葬墓地です。巨大な石で囲
い、天井も大きな石で蓋をしま
す。西欧地中海沿岸に残ってい
るドルメンの一種としても紹介
されます。横穴式墓地は、自然
の洞窟や岸壁などを掘り込んだ
墓をさし、沖縄島によく見られ
る亀甲墓が代表的です。

とうゆみや ばか ちりまら とうゆみや はか
豊見親墓 (知利真良豊見親の墓)

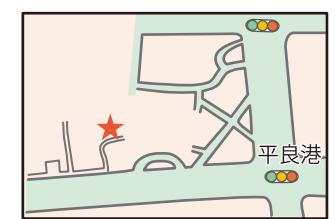
ツンプン (ヒンブン)
門の内側の仕切り屏。外
からの目かくしや、魔除
けの意味をもつ。



この墓は 1750(乾隆15)年頃、平良の頭、宮金氏寛富が築造
したと伝えられています。仲宗根豊見親の墓とともに“ミヤー
カ”と横穴式の折衷様式を示す代表的な墓です。また、ツンプン
の跡が残り、“ツンプン墓”とも呼ばれています。宮金氏寛富は
1745～1762(乾隆10～27)年まで平良の頭職を務め、杣山
惣主取として大野山林の造林をはかるとともに、瓦の製造を始
めたとも伝えられています。知利真良豊見親は、仲宗根豊見親
の三男で宮金氏の元祖です。1500(弘治13)年、父と八重山の
オヤケ赤蜂征討軍に加わり、その後、次
兄祭金豊見親が4年在勤したあとを受
けて八重山の頭職となり、かの地で没
したと伝えられています。

とうゆみや ばか
豊見親墓 (あとんま墓)

ちゅうどう うじ
忠導氏にゆかりのある墓で、同氏族のあとんま(後妻)だけ
を葬ったことから、俗に“あとんま墓”と呼ばれています。
墓は岩盤を掘り込み、切石と組み合わせた墓で、いつ建造
されたかは明らかになっていません。忠導氏は16世紀初頭に
宮古の支配者として君臨した仲宗根豊見親を元祖に、数多く
の頭職を出し、勢力を誇った系統です。その勢力・財力を背
景に、宮古の風習として本妻と同じ墓
に葬ることのできなかったあとんまの
墓を設け、その靈を弔ったものと思わ
れます。



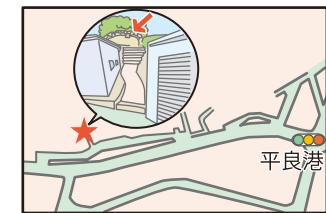
おん がー さと ぬ し ペー ちん ぼひ
恩河里之子親雲上の墓碑



「支流長眞氏恩河仁也、乾隆年間卒向姓恩
河里之子親雲上墓 同治11年壬申在番同氏花
城親雲上記」と刻まれており、下の方には
蓮弁の絵模様が描かれている。墓碑に絵模
様を描くのは、死者の極楽往生を願う仏教
の思想で、沖縄島あたりでは、ほかに日輪
や唐草模様などがよく用いられている。



この墓碑は旧藩末期に建てられ、現存する墓碑では比較的
古く、砂岩で造られています。恩河里之子親雲上の墓碑を建
てた花城親雲上は、1872(同治11)年に首里王府から派遣され
た在番で、1874年に病で亡くなりました。彼の任期中、平良
の頭、忠導氏玄安ら54名が犠牲となった「台湾遭害事件」や
「ドイツ商船ロベルトソン号宮国村沖遭難事件」が起き、ま
た「琉球国が琉球藩」となりました。これらの事件と墓碑に
関わりはありませんが、花城親雲上が
宮古に赴任してきたことの証拠であ
り、近世末期に起きた事件などを彷彿
させる貴重な金石文です。



ま だま う たき
真玉御嶽

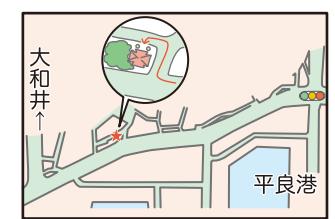


平良の海岸端、通称「パスタナカ」広場の南方にあります。『御
嶽由来記(1705)』には「祭神 男神金殿・女神まつめが」「諸願に
つき平良4か村崇敬す」と記されています。

ま だま う たき ゆ らい
真玉御嶽の由来

むかし ま だま ち かねどの
昔、真玉の地に金殿とまつめがとい
う貧しい夫婦がいました。ふたりは正
直者で神様を大事にしたので、次第に
子孫繁昌し、贅沢ができるようになり
ました。それでもますます良い行いを
し、長生きをしたので、人々は夫婦の骨

ま だま やま ほうむ
を真玉山に葬り、神として祀りました。
かりー えん ぎ
この嘉例(縁起)にあやかるため、子孫
繁昌の神として崇敬されています。



いす にんとうぜいせき ぶばかり石 (人頭税石)



ひららあざにかどりうみぎわ
平良字荷川取の海際に、
ひとせたけせきちゅうた
人の背丈ほどの石柱が立つ
ています。地元では「ぶばかり
いす (賦計り石)」と呼び、
「この石より身長が高く
なったら人頭税を課せられ
た」と伝わっています。石柱
やなぎたくにおちょかいなんしょうき
は柳田國男著『海南小記

(1925)の中でも紹介され、全国に知られるようになりました。

宮古の近世は、数え15才～50才までの男女に税が課され、
男は粟、女は布を納めました。それは苛酷な税制で、役人による
税の取り立てに、人々は長年苦しめられたといいます。

税制に身長は関係なく、この石と史実
は異なるようですが、人頭税による生活
の苦しみをこの石に託して語り伝えて
きた人々の思いが込められた石柱です。



人頭税の歴史

1637(崇禎10)年、琉球王府は先島(宮古・八重山諸島)に人頭税制を施行しました。この税制は頭数(人口)を基準に粟や織物を税として割り当てたもので、役人の見立てにより税を納めさせされました。1659(順治13)年には、頭数の増減に関係なく一定の税を納める「定額人頭税」制となり、更に、1710(康熙49)年には15才～50才の年齢が基準とされました。

女性が織った御用布は島の税の3分の2を占め、また薩摩上布として大阪で高値で取引されていたため、天候不順で飢饉に見舞われたときでも滞納は許されず、実質的に強制労働に近いものでした。また、税を確実に納める手段として、各村に「五人組」という制度が設けられ、その組の誰かが年貢を納められなかった場合、その組で責任を持たされ、また、五人組が納められない場合は村が、村が納められない場合は島全体でまかなうという、連帯責任のシステムが取られました。

1888(明治21)年の大飢饉を機に人頭税の廃止が訴え始められ、

1893(明治26)年、代表団が上京して請願書を国会に提出しました。その請願書には農民の生活が次のように記されています。

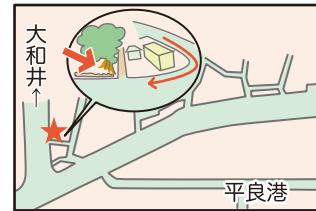
『島民はさつま芋を常食とし、大半の島民は粟の味を知らず。味噌を持っている者は全島民の4分の1でほかみなかいすいたいもは海水に水を足して芋の葉や蔓、海藻などを煮て食べている。醤油などは口にすることは無い。衣服は夏は芭蕉布1枚、冬は破れた木綿の着物を1枚上に着るのみ。ひどいところは1、2枚の夏着を家族で代わる代わる着ている。建物も丸太の上に草で屋根を葺き、茅を編んで四面を囲っているだけで、大半は土間で、蓆を敷くのは稀である。家も非常に小さく、要するに本州の乞食を彷彿とさせる(一部要約)』

こうした廃止運動が実り、1903年(明治36年)1月1日の新税法施行に伴い、260余年にわたる人頭税は廃止されました。

ばく がー う たき
湧川まさりや御嶽



この御嶽は、宮古の龍宮伝説を伝える貴重な御嶽です。
ガジュマルとクロツグ、フクギが生い茂り、昔は古い壺が祀
られていましたが、いつのまにかなくなってしまいました。
2018(平成30)年に地主の土地活用によって駐車場の一角に
配置されています。
近くに海へ流れ出る水の湧き口が
あったことが、御嶽の名前の由来であ
るとも伝わっています。

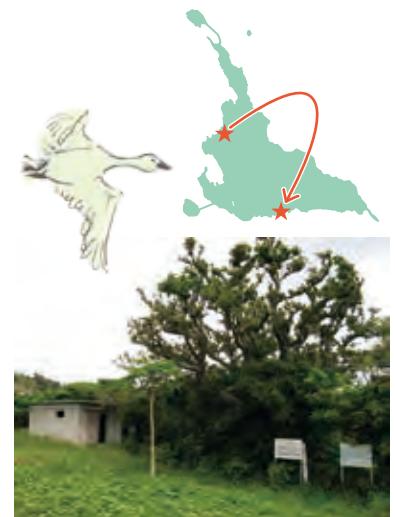


みや こ りゅうぐう でんせつ
宮古の龍宮伝説

むかし に か どり むら ぱくがー
昔、荷川取村に湧川まさりやとい
う漁師がいました。ある日、漁に出
てエイを釣ると、そのエイがたちま
ち美しい女性に変わりました。まさ
りやは一目惚れして夫婦の契りを結
びますが、女は海へ戻っていってし
まいました。

2、3ヶ月たったある日、同じ場
所で釣りをしていると、2、3歳の
3人の子どもがどこからともなく現
れ、「母の使いで父を龍宮に案内す
るために来ました」と言いました。
まさりやは不審に思いましたが、子
どもたちがまさりやの手を取って海
に入ったかと思うと、たちまち金銀
きらめく楼閣の中にいました。子
どもたちの母は以前に契りを結んだ女
に間違いなく、親しげな顔でまさ
りやを出迎え、三日三晩、酒や料理
でもてなしました。別れ際、女は涙
を流し、「これをいつまでも私の形
見と思って下さい」と瑠璃色の壺を
手渡しました。まさりやは一気に現
実に引き戻された気持ちで家に帰っ
たのですが、龍宮での三日三晩はこ
の世では3年3ヶ月の月日が過ぎて
いました。瑠璃壺には神酒が入って
おり、呑んでも呑んでも酒は尽きる

ことなく口の渇きを癒し、天の甘露
のような美味しい酒でした。これを
呑んだ者は無病息災で長生きしたた
め、まさりやは家宝として秘密にし
ていましたが、やがて村中の噂とな
り、大勢の村人が壺を見ようと家に
押しかけてきました。まさりやはい
つの間にか贅沢な生活に思い上がり
てわがままになっており、「この酒
は朝晩とも同じ味で、もう呑み飽き
た」と言いました。そのとたん、壺
は白鳥と化して空に舞い上がり、東
の宮国村のスカブ屋という家の庭木
に留まり、姿を消してしまいました。
『御嶽由来記』より



宮国村のスカブヤー御嶽
白鳥がとまつたとされる木が祀られている

うたき ウプムイ御嶽



この御嶽は、荷川取村の御嶽としてヤブ(民間医者)が祀り始めたと伝わっています。境内はコンクリートで舗装され、北側に主神マツカマが祀られています。西側に3か所の祭壇があり、「真玉御嶽」、「ツカサヤー(漲水御嶽)」、下地の「赤名宮」などの神々を遙拝(遠くから参拝)する場所となっています。御嶽の周りにガジュマルやクロツグなどが広く茂っていることから、ウプムイ(大森)と名付けられたようです。



ざとうたき カーニ里御嶽



この御嶽は、カーニ里の守護神が祀られています。中央に30cmほどのイビ(香炉)と、香炉がわりの切り石が置かれ、低い石積みで囲っています。後方にクロツグ、テリハボク、フクギなどの御嶽林が茂っています。以前は御嶽のサス(神女)を中心に里人揃って祈願行事を行っていましたが、サスのなり手が途絶えたため、現在は各個人で参拝しているようです。

御嶽は20数mの細い参道が三方向に設けられ、参道の両脇には苔むした低い石垣が続いています。昔、この地に仲宗根豊見親の側室が住んでおり、御嶽の西の門には門番が立ち、3本の道路は緊急時のピンギンツ(逃走路)だったと伝わっています。



やまとがー やまとがー がー うぶかー
大和井 (大和井・ブトゥラ井・大川)

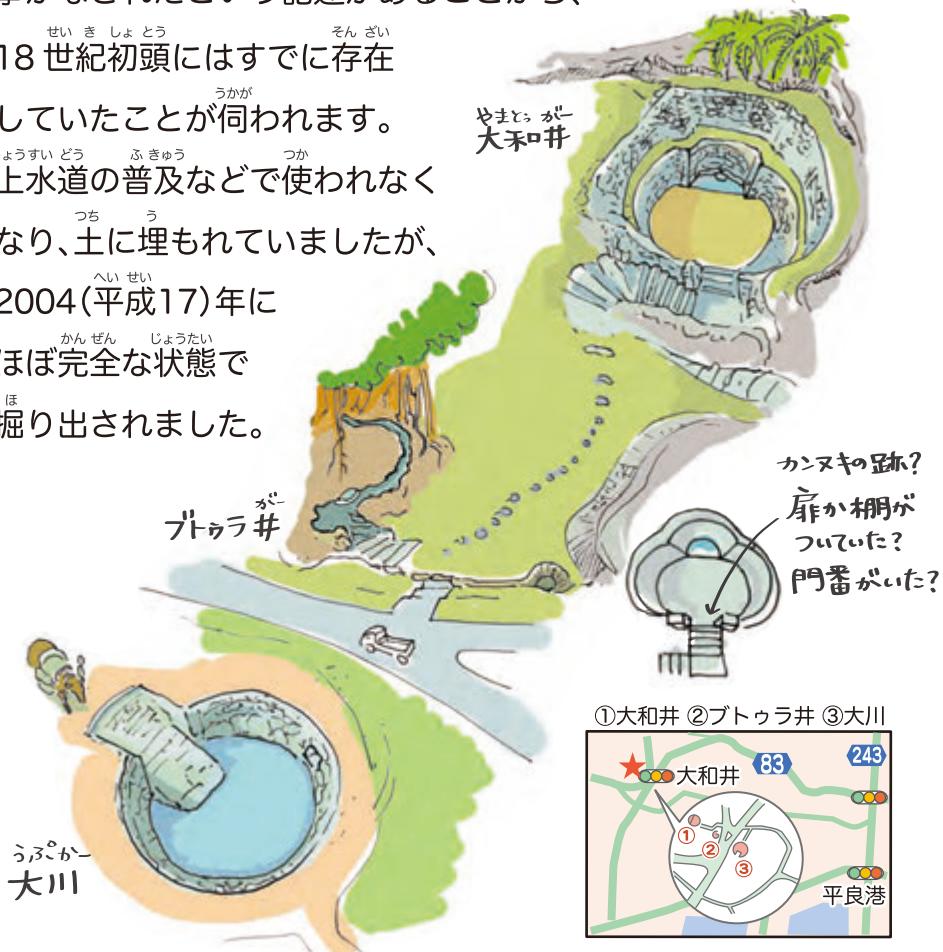
一般的に降り井は洞窟に石階段を設ける程度で、多くは自然のまま利用されていましたが、大和井は全体にわたって石が積まれています。下部に大きな石を置き、上部へいくにつれ小さな石に変わり、石も自然の石ではなく切り石を円形に積み上げています。『雍正旧記(1727)』によれば、1720(康熙59)年頃に掘られたと考えられています。大和井は首里王府から派遣された役人や頭などごく一部の役人が使用し、庶民には開放されな

かったといわれています。また、他には見られないかんぬきの跡があり、水守もいたと伝わっています。

対してブトゥラ井は簡素な造りで、一般の住民用として用いられていたものと考えられています。

大川は牛馬専用の井戸で、数多く存在する井泉の中でも牛馬専用のものは珍しく、『雍正旧記』に1717(康熙56)年に補修工事がなされたという記述があることから、

18世紀初頭にはすでに存在していたことが伺われます。
上水道の普及などで使われなくなり、土に埋もれていきましたが、2004(平成17)年にほぼ完全な状態で掘り出されました。



ふ　さ　い　う　た　き
保里御獄



この御獄の周辺は、14世紀前期に保里天太が築いた城跡と伝えられています。神域には入り口からフクギ、ガジュマルなどの古木がそびえ立っています。古木の周辺には神域を囲った石積みの跡が残っています。入り口から30mほど入ったところにイビ(香炉)があり、中央には「テダノ主神」、その左右に「水の神」「トビトリノ神」と記されています。



ふ　さ　い　い　だ　む　す　こ
保里天太とふたりの息子

保里天太には保久利屋盛と居士佐加利というふたりの息子がいました。兄の保久利屋盛は急け者で才能がなく、弟の居士佐加利は見目もうるわしく、器量もよく、兵法の達人でした。保里天太は、才能のない兄ではなく弟に家督を継がせようと考えていましたが、兄は弟の臣下になることは末代までの汚名だと、ある日、城下の父老たちを集め、「お前たちの娘らは、ブトウラ井に水汲みに行く途中で私の弟に強姦されようとしている。父もまた騙されて弟に家督を譲ろうとしている。弟が天太になれば、お前たちも苦労するだろう。今、これを戒めなければ将来

必ず悔いを残す」とありもしない話を作り上げて弟を悪く言いました。城下の父老たちはこれを信じ、保久利屋盛の策略に従って居士佐加利を捕らえようとした。ところが、居士佐加利は先にこれに気づき、城から逃げ出し、城辺の箕の隅という山里に隠れ住みました。この相続争いを保里天太が毎日嘆き悲しんでいると、ある日、保久利屋盛は「弟が城辺の箕の隅にいると聞いた。早々に弟のところへ行くがよい」と父を追い出します。保里天太は泣く泣く住みなれた城下を離れます。城辺に向かう道中につまずいて倒れ、息を引き取ったと伝えられています。

『宮古島記事仕次(1748)』より

ぷち歴史
比較年表

※琉球史の慣例により、1372～1878年は中国との朝貢関係を重視して中国年号で表示。

